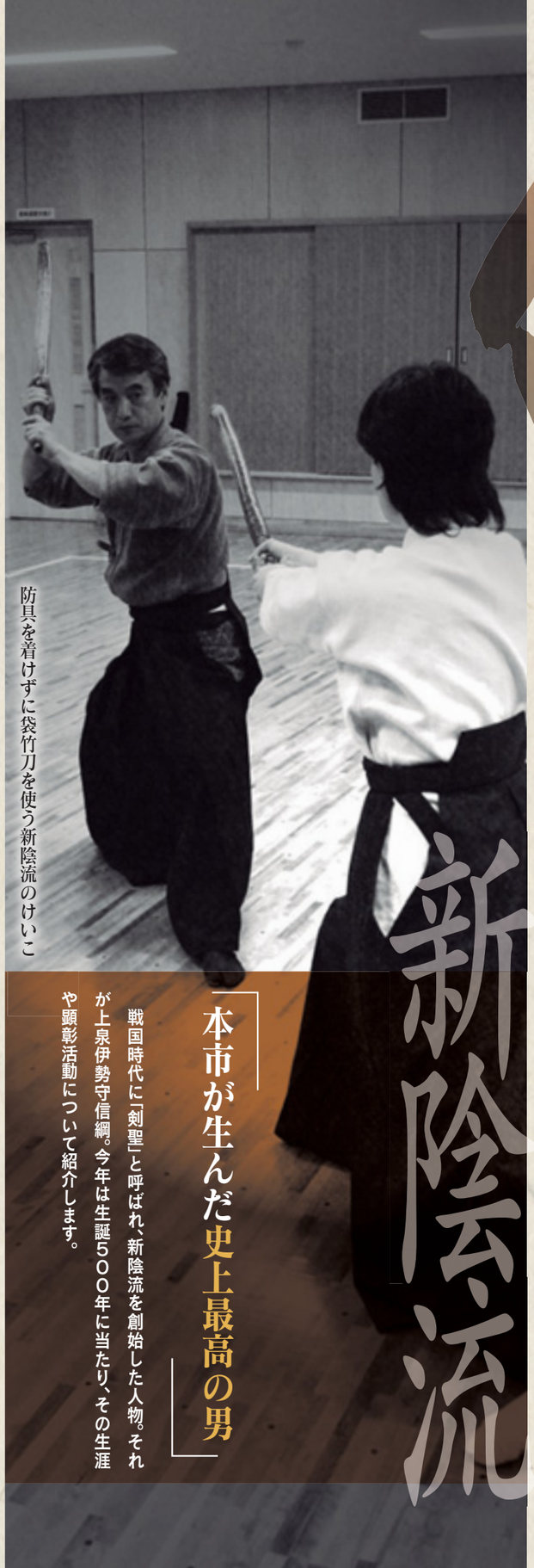
特集

剣聖

上泉伊勢守信綱

新陰流



防具を着けずに袋竹刀を使う新陰流のけいこ

「本市が生んだ史上最高の男」

戦国時代に「剣聖」と呼ばれ、新陰流を創始した人物。それが上泉伊勢守信綱。今年は生誕500年に当たり、その生涯や顕彰活動について紹介します。

荒砥川西岸の丘の上にある大胡城跡

上泉家の起源

上泉家の始まりは、大胡氏にあるとされています。大胡氏は、藤原秀郷の子孫であり、藤原鎌足が始祖であると伝えられ、鎌倉時代に有力な御家人として源頼朝に仕え、何度か京へ行ったと「吾妻鏡」という歴史書に記載されています。藤原重俊が上野国赤城山南面の勢多郡大胡に城を築き、大胡太郎と称し、ここから大胡姓が生まれました。しかし、武勇名門の大胡氏も室町時代には勢力が衰退。これを再興したのが、一色家であります。大胡氏の親せきで、一色左京大夫義直が、京から孫の一色五郎義秀を派遣し、義秀はその任務に応え、大胡家を再興したと伝えられています。

再興を果たした義秀は大胡城を地元の大胡氏に譲り、1455年、自ら約5キロ西の上泉に城を造り移り住みました。これが上泉城。現在の大胡県道下で合流する桃木川と藤沢川に挟まれた東西600メートル、南北400メートルの位置にあります。義秀はその後、上泉の姓を名乗り、上泉家初代となりました。家格は代々従五位下で、関東でも高い位であり、大胡家を再興した義秀は上泉伊勢守信綱の曽祖父にあたります。

熱心に学び続け「新陰流」を

上泉伊勢守信綱（以下信綱と記す）は、今から500年前に上泉城主・武蔵守義綱の次男として、1508年に生まれました。

幼名を源五郎、その後に伊勢守秀綱、武蔵守信綱と改名しています。兄1人と弟妹の4人兄弟で、兄の主水佐は18歳で亡くなり、恭姫と呼ばれた妹は16歳で箕輪城主の長野業政に嫁ぎました。

信綱は、幼児期より兵法、兵術を祖父や父に学びました。初めて木刀を握ったのは6歳のころと伝えられています。生まれ持った優れた才能を発揮し、13歳のときに鹿島（茨城県）に行き、松本備前守に剣を学んで4年後に帰郷。さまざまな流派の中でも陰流を熱心に学び続けました。その卓越した資質と努力が見込まれ、陰流の剣客・愛州移香斎から最高の極意や陰流すべての指導を受けました。この陰流兵法こそは、信綱兵法の大もとをなすものであります。さらに信綱は、兵法諸流の長所を研究し短所を補い、これに創意工夫を加え、ついに兵法一流を創始しました。すなわち「新陰流」であります。

「某、幼少より兵法兵術に志有るに依り、諸流の奥源を究め、日夜工夫鍛錬致すに依って、尊天の感心を蒙り、新陰の流を号す」と、1565年信綱が柳生宗厳に与えた印可状にそう書いています。新陰流の教えの一つに「活人剣」があります。当時の戦い方は、力と速さで相手を圧倒して勝つ「殺人刀」。その戦い方では百戦錬磨の剣豪も攻め続けるうちに、いずれすきが生じると。信綱の唱えた「活人剣」は、敵を動かし、敵の動きに応じて剣を振るというものです。攻守一体となったこの剣には生があり、人を生かす剣、人の命を大切にする剣、いわば人間愛に貫かれています。信綱は、剣を通じて、戦乱のない世の中を作ろうとしていたのです。

上泉城本丸跡に建つ上泉郷蔵

戦国時代の攻防

時代は応仁の乱後の戦国時代。当時の上州の地は、北条、上杉の主戦場となったばかりか、西から武田の脅威を受けていました。信綱は平井城の上杉氏の被官でした。上杉方の箕輪城主の長野業政と連携を組みましたが、その一方で信綱の夫人が北条氏にゆかりがあることから、北条氏とも連携をし、信綱の子秀胤や孫泰綱らは北条氏に士官していました。

長野業政は、数度に及ぶ武田勢の侵攻を乗り切りましたが、1561年9月に業政が没するとその後、間もなく箕輪城は落城。業政の子業盛も19歳で自刃し、家臣らも後を追いました。

箕輪城の攻防で、信綱の武勇にほれた武田信玄は再三にわたり招請しましたが、信